

役人転生 I F ルート～
先生になった私はどう
したらいいのだろうか
～

トマホーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

役人転生の続編？リボンの武者ルートです。

こちらは不定期更新になります

目次

出会いは唐突に	1
多芸	5
歯車は巡りて	9
調練	13
かつての教え子	16
勝敗	21
邂逅のち開戦	25
受難	29
元役人の影響力	35
密会	42
威光と意向	46
嫉心	50

出会いは唐突に

あの試合が終わってから早一ヶ月。本当に色々とありました。

……聖グロリアーナ女学院の戦車道OGの方々が同窓会と称して各地で戦車道の試合を開催し、チャーチル・クロコダイルで「たまたま偶然」牟田元大臣や文科省の上層部の方達の家々やら別荘やらを焼いてしまったり。

懇意にしていた記者がどこから入手したのか、大洗廃校の裏事情を記事にして暴露してくれたお陰で私が聖人の如く持ち上げられてしまっていたり。

島田流への移籍を賭けていた事についてかほさんのお説教を受けたり。

みほちゃん達の勧誘競争が身の危険（意味深）を感じる程激化したり。

口には出せないような出来事があったりと試合後のゴタゴタは本当に大変な事ばかりでした。

……まあ、そんな事等があり少々洒落にならない状況になってしまったため今は雲隠れしてほとぼりが冷めるまで世間やみほちゃん達の前から姿を消しているんですけど、雲隠れ中の今は何をしているかと言いますと。

楯無高校の学園長に頼んで臨時教師として雇って頂き一教師として働いております。

いや、少々テレビで顔が出回ってしまったので私だとバレてしまわないか赴任当初は心配でしたが、七三分けの分け方を逆にしてメガネを変えたら結構バレないもんですね。

まあ、知り合いに会ったりしたら流石にバレるでしょうけど。

とにかく。今は楯無高校の個人用教員室を新天地とし平和に――

「頼もう!!」

……平和、終わったみたいです。

「えーと……鶴姫しずか君に松風鈴君でしたか。君達の話をつなぐとタンカスロン（強襲戦車競技）に出たいという事で宜しいですか？」

「然り」

それはまた……なんとも……ねえ？

「一つお聞きしたいんですが……戦車道ではいけないんですか？」

「否、この学校には戦車道部はおろか戦車の1輛もありませんね」

確かに。楯無高校の戦車道部は10年前に廃部にされていきますからねえ。

しかし、何かあるか分からないと思って私が大洗と同じ様に何輛か戦車を隠してありますから、部を立ち上げて人数さえ確保すれば始められると思いますよ。

まあ、隠した車輛を使うよりウチにある車輛を使えばいい話なんですけどね。

「戦車でしたら私が手配——」

「それに私が欲するのはお遊戯（戦車道）では無く、本物の戦車戦（タンカスロン）故
「ふむ。戦車道はお遊戯……ですか」

中々に言つて——いやいや、面白い子ですね。

「つ!!」

「ヒッ!!」

「うん? どうかしました?」

あ……もしかしてやつてしまいましたかね?

「いえ、何も（この御仁は……一体）」

「な、何でも無いです……（先生、一瞬だけ凄い恐い顔に）」

いけませんね、昔からの悪い癖です。戦車道の事となるとどうも熱くなつてしまい
（元）師範代の顔が出てしまいますから自重しないと。

「して……さつきもお話し致しましたが、本来タンカスロンは野試合で戦車道の公式試
合とは違つて誰でも自由に参加が出来たらしいのですが……どこぞの教育熱心な殿方
がタンカスロンを管理運営する組織を立ち上げてしまったために、高校生の場合は顧問
もしくはそれに準ずる監督官を用意せねば試合に出れなくなつてしまつています」

……目の前にそのどこぞの教育熱心な殿方が居ると教えたら、この子はどんな顔をす

るんでしよつかね？

というか、組織を立ち上げしまったと苦々しい顔でしよつか君はおつしやっていますか……タンカスロンをあのまま放置しておく訳が無いじゃないですか。

どんなスポーツであれ最低限のルールと管理者がいなければ最悪の事態を予防する事も対応する事も出来ないのですから。

「それで私に顧問になって欲しいと？」

「然り。まずは学園長に相談したのですが、貴殿が適任だと言われたためこうしてお願いしに馳せ参じた次第です」

学園長……私に押し付けましたね？

「ふう、分かりました。顧問の件はお受けしましょう」

「ここで受けなかつたらこの子達は隠れてこつそりとやりかねませんからね。

「おお、感謝致します」

「ありがとうございます」

ま、出来る範囲で生徒のために働くのが教師の務め。

少々暇を持て余していたことですし、この子達の事をしっかりと見守ってあげますか。

多芸

さて。しずか君に大至急タンカスロンに参加するための必要書類を揃えて欲しいとお願いされたので急ぎ揃えて持って来ましたが、ここですかね？しずか君のお宅は。

「すみませーん。どなたかいらっしゃいませんか？」

「少々待たれよ——お待たせ致し……ああ、先生でしたか。無理を言つたばかりか休日にご足労痛み入ります」

「いえいえ、構いませんよ。はいこれ。頼まれていたものです」

「おお、感謝致します。これでようやく……」

ハハハツ。目を爛々と輝かせてもうウキウキですね、しずか君は。タンカスロンがやりたくてやりたくて仕方ないみたいです。

「姫—？お客さんが来たんだつたらちよつと休憩してていいからねー……つて、先生だったんですか。こんにちは」

「はい、こんにちは。鈴君もしずか君のお宅にいらしていたんですね。うん？」

何か油まみれになっていきますけど鈴君。大丈夫なんでしょうか？

「あ、これですか？ちようど今タンカスロンで使う戦車の整備をしていた所なんです。

「そうだ、先生も戦車見てみますか？」

「はい。是非とも」

ほう……事前には戦車はあるとお聞きしていましたが九七式装甲車——テケ車ですか。

2人しか乗員が居ないし、ずか君と鈴君には色々な意味でピツタリの戦車ですね。

しかし、長い間放置されていたのか所々くたびれています。

まあ、無理をしなければこのままでも暫くは使えますかね。それにいざとなったらパーツを取り替えれば問題は無いでしょう。

「……姫、これどうするの?」

「ううむ……困った」

「どうかしましたか?」

テケ車のエンジンルームに頭を突っ込んでエンジンの状態を確かめていたら、何やら後ろでしずか君達が神妙な顔して唸っています。

「えっと、それが……この書類の……こんなですけど。タンカスロンに参加する車輛は戦車道連盟の認定試験を合格している一級整備士の方に車輛を確認してもらって使用の許可をもらわないと試合に出てはいけないうって事になってるんですけど……」

「少々調べた所、その必要経費が高い故。どうするか頭を悩ませていたのです」

「……ふむ」

ああ、その件でしたか。

「はあ……学校に部の設立申請はしたけど部員数が少ないっていう理由で同好会扱いにしかならなかったから部費なんて出ないし」

「これでは資金集めから始めねばなるまいか」

「それでしたら私が一級整備士の資格を持っていますから大丈夫ですよ?」

「なんと!」

「嘘!」

そんなにビックリしなくても。

「せ、先生って以前は戦車道の整備士だったんですか?」

「いえ、違いますよ。元々趣味の一環で2級整備士の資格を取ってしまってたね。その後、西住流の門下で戦車道をやる事になった時に1級も取ったんです」

「2級でも趣味の一環で取れるような資格じゃないと思うんですけど……」

「お待ちください!!資格云々よりも先生が戦車道の経験者!?!しかも……しかもあの西住流の門下というのは誠ですか!!」

西住流と聞いた途端にしずか君の目の色が変わったんですが……。

しずか君は西住流に憧れでもあるんでしょうか?

「ええ、まあ」

「なんとという僥倖。先生!! 私に砲術の稽古を付けてはもらえませぬか!!」

「わ、私も整備の事とか戦車の操縦を教えて下さい!!」

「はい、構いませんよ。というか、顧問なんですから当然です」

「おお、これで我々も色々技を磨く事が出来るというもの」

「やったね、姫」

うーん。本当はちよつと離れた場所から見守るだけの名前だけ顧問のつもりでしたが……お願いされた以上はしっかりと教育を施してあげねばいけませんね。しっかりと。

齒車は巡りて

しずか君の家にあったテケ車の整備と点検が終わり、試運転と試射をするというので北富士戦車道演習場まで一緒にやって来ましたが。

思った以上にたくさんの方が射撃や走行の練習に励んでいます。

いやゝ活気があるのは良いことですね。

「あの……先生？」

「何ですか？ 鈴君？」

「何でサングラスとマスクをしてるんですか？」

「……気にしないで下さい」

「は、はあ……」

「ここでみほちゃん達と会う事はそうそう無いとは思いますが、万が一という事がありますから変装はしておかないといけません。」

「というか、今更ながらに少し後悔が……」

「みほちゃん達から逃げて——ゲフンゲフン。距離を置いている立場なのに戦車道に近いタンカスロンの顧問になんかなったら自分から遭遇しに行っているようなものな

んですよね。

後悔先に立たずとはよく言ったものです。

「では私は受付を済ませて来ますから、君達は先に場所を確保しておいて下さい」

「承知」

「分かりました」

さてと、受付受付つと。

「——改めて御名を頂戴したい!!身共は楯無高校の鶴姫しずかと申す!!」

「サンダース大学付属高校のアリサよ。なにその口調。中二病?」

……ちよつと目を離れた隙に何でサンダース大学付属高校のアリサ君と試合をする

事になっているんですか!?

というか、やっぱりサングラスとマスクをしてきて良かったです。

もししていなければアリサ君経由でケイ君に居場所がバレる所でした。

「くくっ……お主も似た者同士だろう?」

「一緒にしないでよ。私は彼氏持ちのリア充よ!!」

あ、アリサ君が嘘を付いてます……。

「では、各々方また後ほど!!」

あらら……これはまた厄介な事になってきましたね。

しかし、しずか君達は私を放つといてどこへ行くつもりなんですか。完全に置いてきぼりです。

「全く……ふざけた奴だったわね。うん？失礼ですけど貴方さっきの子達の保護者か何かですか？」

ギクリ。しずか君達の後を追おうとしたらアリサ君に捕まってしまいました。

「え、ええ、まあ……一応顧問です」

「だったら、ちゃんと面倒を見ておいてもらいたいですけど。あんな素人に好き勝手やられてこつちはいい迷惑なんです」

「も、申し訳ありません」

好き勝手つて……しずか君は何をやらかしたんでしようかね？

「今度からはしつかり……ちよつと待つて。貴方、私とどこかで会った事がありますか？」

「い、いえ、初対面ですよ？あ、急ぎますので私はこれで。では」

「あ、ちよつと!!……あの雰囲気……絶対にどこかで会つてるような気がするんだけど……誰だったのかしら？」

危ない危ない。

もう少しでアリサ君に私の正体を勘づかれる所でした。

やはり既知の人物に会うのは危険ですね。しかし、試合をやる際にはまた会う事になるでしょうから何か対策を取らないと。

でも、サングラスとマスク以上の変装となると不審者率が大変な事になってしまいうんですよね。

……まあ、極力人前に出ないようにして対処しますか。

調練

北富士戦車道演習場で急遽決まったアリサ君との試合が目前に迫り、またしずか君と鈴君に教鞭を執るようお願いをされていた事もあつて楯無高校の演習場で砲術及び機動訓練の、そしてタンカスロンに参加するために必要な精神力を鍛える特訓の指南をしていたのですが。

「先生、これはやり過ぎなんじゃないですか？」

「……そうですかね？」

久し振りに戦車の指導をするという事で少しばかり張り切り過ぎましたかね？

自分ではまだまだ手加減した方だと思ふんですけども……。

しかし、訓練の様子を見ていた第三者——しずか君と鈴君のクラスメイトである遠藤はるか君にやり過ぎではないのかと言われてしまった以上は私が熱を入れ過ぎてしまつていた部分があるのでしよう。

「さ、流石は西住流……これ程とは……無念」

「……うう、気持ち悪い」

現に2人ともグロッキー状態でダウンしてしまつてゐる訳ですし。特に鈴君。

まあ、通常の砲術訓練と機動訓練でしずか君と鈴君のチームワークを確認してから、準備体操として私が操縦する S t r v . 1 0 3 ——通称 S タンクとの模擬戦を 3 時間程やった所まではまだ良かったと思うのですが……。

あれは——通常は戦車の内側に施されているカーボンで戦車の外側にも張り付けて戦車が傷付かないようにしてから——2時間ぶっ続けで多方向から機銃やら砲やらの各種弾丸を浴びせ続けたのは素人には少々酷でしたか。

しかし、これ（被弾馴れ）をやっておかないと試合中に被弾してパニック状態になったりした場合にアニメでのウサギさんチームのように車外へ出てしまうという一番危険な状況を引き起こしかねませんからねえ。

ま、何にせよ初日だからと極々軽めのメニューを組んでおいて良かったです。

この分では最初から厳しめのメニューをしていたら 2 人とも潰れてしまっていたかも知れません。

「では、お 2 人も限界のようですし今日はこれぐらいにしておきましょうか」

「ま、まだまだ……やれ……うつぶ……」

「……あう……もう立てないよ、姫」

あらら、これは駄目ですね。練習がかなり堪えた様です。

夜間訓練と明日の早朝訓練は無しにしておいて本当に良かったです。

「はるか君。すみませんが2人を介抱して上げてもらえますか？私は戦車の整備や演習場の片付けをしてきますから」

「分かりました。ほら、鈴。肩を貸すから立って。鶴姫さんも」

「……ありがとう」

「か、かたじけない」

うーん。本当なら明日から本格的な練習内容にするつもりだったのですが……まあ、もう少しゆつくりと様子を見ながら段々とギアを上げていきましようかね。

かつての教え子

さてはて。あつという間にしずか君がアリサ君と試合をする日になってしまいました。た。

本音を言えばもう少し練習を積んでから試合に挑んで欲しかったのですが。

まあ、こればかりは言っても仕方ありませんね。

とりあえず一定の技量が身に付いただけでも良しとしましょう。

……おや？ B-29に牽引されたグライダーに乗って空からとはまたド派手な登場の仕方でありサ君達はやって来ましたね。

サンダースらしいと言えばサンダースらしい登場の仕方ですけど。

「これでよし。感謝致します、先生。甲冑を着るにはどうしても人の手を借りねばなりません故」

「構いませんよ」

それにしても用意があるからと言って陣幕を張ったかと思えば、いきなり甲冑を着込み始めるとは……実に個性的な子ですね。しずか君は。

しかも、弓矢まで持ち出して。

……弓矢は絶対にアリサ君から文句を言われそうな気がしますけど。

「失礼します。対戦相手の方々が揃いましたのでそろそろ出てきて頂けますか？」

ほう。今日の審判兼監視員を務めるのは榛名君ですか。

いやはや久しぶりにお会いしました。

しかし、すっかり監視員が板に付いてますね。私が出会った時は典型的な不良少女だったのですが。

今はまさしく出来るキャリアウーマンと言った感じですよ。

「これは失礼。すぐに参ります」

「……ちよつと待って下さい。それは何ですか？」

「戦には必須のモノ他」

「……こちらでは判断致しかねますので対戦相手の方に使用の判断を仰いで下さい」

「分かり申した」

まあ、弓矢についてはそうなりますよね。

私を作ったのは管理運営の組織だけで実際の試合ルールは一部（安全面）を除いて以前のまま——何でもありませんから。

今のように相手の許諾を取るように指導するのが精々といった所でしよう。

「——姫!!しずか姫出てきて!!」

「応ッ!!では行つて参ります」

「ええ、頑張つてきて下さいね」

さてと。しずか君が出陣した事ですし私はこのまま陣幕の中から試合を見させて頂きましようか。

さつき陣幕の向こうからケイ君の声が聞こえていたので外に出るのは危険ですしね。

「全く最近の子は……それで先生?今度は何をなさるおつもりなんですか?」

「え、えつと……どなたかと勘違いされていませんか?」

あ、あれえ?サングラスとマスクをして更にロン毛のカツラまでしてきたのに一発で正体を見破られてしまっているような。

「その程度の変装で私の目を誤魔化せると?」

「ひ、人違い——」

「余分なモノを無理やり剥ぎ取つても構わないんですよ?」

「すみません。許して下さい」

流石元ヤン。眼光が怖いです。

「全く。突然姿を消したと思つたら楯無高校で先生をやっているなんて。みんな心配したんですよ?」

「いや、まあ……色々ありました」

「存じています。試合後の痴話騒動は私もテレビで見っていましたから」
「……」

痴話騒動つて……いや、確かに端から見たらそうなのかも知れませんが。

しかし、あの一件がテレビに流れたがために世間から身を隠さねばならなくなつたんですがね。

まあ、記者の方が大洗廃校の真実とかいう記事を書いた事も影響していますが。

「しかし、だからと言つていきなり雲隠れするのはやり過ぎです。あ、まさかまた何かするつもりなんですか？」

「いや、そんなに毎回毎回何かをするつもりは無いです」

「そうですか。……だったら私にぐらい居場所を教えてくれないじゃないですか」

「え？何か言いましたか？」

「……そういう所が変わつて無いのがムカつきます」

「……？」

何か榛名君が怒っているんですけど……。

「まあ、いいです。こうして会えた事ですし。あ、そうだ。どうせならこのまま2人で試合を見ませんか？」

「それは構いませんけど……審判と監視員の務めを放棄するのは感心しませんよ」

「ご心配なく。今回私は遠方監視の副審判ですからここに居ても問題はありません。だから良いですよね?」

「……それならまあ」

「では決まりです」

……さつきまで怒っていたと思っただら今度はウキウキしているんですけど、榛名君。一体どういう事なんでしょうね?

「あ、それはそうと私が楯無高校で教師をしているというのはいくれぐれも内密に……」

「分かっています。私だって恩人を売ろうとは思いませんから」

「助かります」

ありがたい事です。

「……誰が教えるもんですか」

凄いなさな声で何かをボソツと呟いた榛名君の顔が怖いんですけど。

本当に黙っていてくれるんですけど……不安です。

勝敗

ああ〜あと少し、あと少しだったんですが……残念です。

しずか君のムカデさんチームがアリサ君のフライングタンカーに敗北を喫しました。

3対1のフラッグ戦でアリサ君率いるM22ロークスト3輜と戦ったしずか君は2輜を立て続けに撃破する事に成功したのですが、2輜目のロークストを撃破する際に体当たりの様な形で右の履帯をロークストの車体にぶつけてしまった事や無茶な機動を繰り返した事が仇となり、3輜目のロークストに乗るアリサ君に向かって突撃を開始した所で履帯と起動輪が外れて行動不能になり敗北してしまいました。

……まあ、初陣にしては上出来ですかね。元々がズブの素人であった事や練習量の事を考えれば。

これから本格的なメニューをこなして行けばもつといい所まで行くでしょう。

しかし、本格的なメニューと言っても昔のような鍛え方は出来ませんからね。

時間が必要です。

「……随分と嬉しそうですね、先生」

「おや？ ついつい顔がにやけてしまっていたようです。」

「ええ、まあ。教え子の晴れ舞台が見れましたし。それにあの子達のやりきった満足気な顔も」

「そうですか。（そういう所も昔から変わっていませんね）……では試合の決着もつきましたし私はこれで」

「はい、ではまた」

「ええ、また……ああ、そうだ。後で仕事用では無くプライベート用の連絡先を送っておいて下さいね？」

「アツハイ」

「……さてと。最後にとつてもいい（怖い）笑みを見せてくれた榛名君も戻って行きましたし、帰りの準備でもしますかね。」

「ナイスファイト!! 中々やるじゃない貴女達」

「賛辞の言葉、感謝致す」

「あ、ありがとうございます!!」

「おや？ しずか君や鈴君、ケイ君が陣幕の向こうで喋っていますね。」

「うんうん。試合後の交流は良いことです。」

「そう言えば試合を見ていて一つ気になったんだけど。貴女達、誰から戦車の事を教

わったの?」

「うん? 師は学校の先生であるが……」

「学校の先生? 自衛隊とか戦車道連盟とかにお願いして来てもらった人じゃなく?」

「はい。最近転任してきた先生が私達の顧問とコーチを兼任してくれているんです」

「へへ最近……この時期に転任ね……どんな人なの?」

あれ? なんか嫌な胸騒ぎがしてきたんですけど……どうしてでしょう。

「どんな……ううむ。我々から見ても高い技量を持ち、しかも整備まで完璧にこなせる御仁でとても頼りになる方であるな」

「練習とかの時は凄く厳しいんですけど、いつもは優しく……ねえ、姫」

「そうだな。それに聞けばかの西住流の門下であると」

「ふくん。西住流の門下……」

な、なんか……陣幕の向こうでドス黒いオーラが漂っているんですけど。

あれは一体……?

「ねえねえ、その人とは是非とも会ってみたいんですけど、いいかしら?」

「うむ。それは構わぬが……どうしてその様に笑っておられるなりや?」

「フフフツ。さあ、どうしてかしらね?」

ツ!? ま、不味い!! ケイ君がこっちに来る!?

「？ まあ良いか。こちらへ」

「フフフツ……あ、そうだ。アリサは帰りの準備をしておいてね」

「イエス、ママ……うう……反省室行き……」

逃げないと大変な事に!!

邂逅のち開戦

「先生、ただいま戻り——む？姿が見えぬな」

「本当だ……どこに行ったんだろ？」

「チツ、勘づいて逃げたわね。……まあいいわ、手掛かりは掴んだんだし」

ふう……危ない危ない。しずか君達が入って来た方とは反対側の陣幕を捲って間一髪脱出に成功しました。

「……」

ここでケイ君に捕まってしまうと大変な事になるのは目に見えていますから……しずか君と鈴君には申し訳無いですけど、このまま先に学校へ戻らさせて頂きましょう。帰りの準備や諸々の手配は既に済んでいますし、急用が出来たので先に帰るという旨を大急ぎで書いた置き手紙も置いておきましたから問題は無いはずですよ。

「……」

あ、そう言えば観戦している途中で邪魔になつて外してしまつた変装道具を忘れてきてしまいました。

……まあ、放っておきましょう。今さら考えていても回収は無理なんですし。

さて、それではケイ君やサンダースの子達に見付からないように帰りましょうか。

「……………何をしているんですか?」

へ?

「ナ、ナオミ君!？」

言ってる側から見つかってしまったんですけど!!というか、ナオミ君はいつからそこに!？」

「ウチの隊長が探してますけど」

「い、いやーその……………ね?ちよつと、ハハハッ……………」

「……………?」

ま、不味い……………ここでケイ君を呼ばれてしまつては逃げる事など到底不可能です。

となれば致し方ありません。ここは最終手段を使うしか無いようです!!

「……………ナオミ君」

「何ですか?」

「お願いです!!見なかつた事にして下さい!!」

必殺、ジャンピング土下座!!

捕まれば死の瀬戸際に最早恥も外聞も関係ありません!!

「……………」

「……」

「……」

「……」

あ、あのー沈黙が怖いんですが。

「……まあ、いいですけど」

「ありがとうございます!!」

良かった……これで最悪の事態は回避出来ました。

ナオミ君には後で何かお礼の品を送っておかないといけませんね。

「では、私はこれで」

「ああ、そうだ。状況が落ち着くまで私達が持つて来たあの救護車の中に隠れていた方がいいんじゃないですか？ウチの隊長の事だから非常線張るでしょうし」

「それもそうですね。ではお言葉に甘えてさせて頂きます」

よいしょつと。

ふう。とりあえずナオミ君の助言通りにこの救護車——牽引車の荷台に積まれたコ
ンテナ型の救護所の中で暫く時間を潰しましょうか。

……しかし、それにしても私が楯無高校に居ることがケイ君に感付かれてしまったのは痛いですね。

まあ、しずか君と鈴君に協力する事を約束した時点でこんな未来が来る事は避けられない定めだったんでしようが……バレルのが些か早すぎます。

まだ全然ほとぼりが冷めてないですし……はあ、困りました。

——ガチャ、バタン。

あれ？誰かが入って——ッ!?

「久しぶりね、レンタ」

「ヒイ!!」

受難

ど、どうしてケイ君がここに!?

ハッ、まさか!!

「……」

窓の外でナオミ君がサムズアップしてるんですけど!?!ハメられた!!

って、ナオミ君!?!何で窓ガラスに濡れた新聞紙を貼るんですか!?!

いやいや、もう一回サムズアップされても意味が分かり——よく見たらサムズアップじゃない!?!女の子がそんなジエスチャーしちや駄目ですよ!!

いつものクールさはどこに行っただんですか!?!

「ようやく見付けたわよ」

「ヒイイ!!あわ……あわわわ……」

ま、不味いです!!逃げ場が、逃げ場が無い!!

唯一の出入り口はケイ君の後ろにしか無いですし、ナオミ君によって新聞紙を貼られてしまった窓は固定式でそもそも開かないですし。

……あれ?もしかして詰みました?

「フフフツ、そんなに怯えなくても大丈夫よ、レンタ」

ならまず凄くイイ笑顔でにじり寄って来るのをやめてもらえませんか!?

「私ね、分かったの」

な、何がです？

「やっぱりレンタも男なんだし、押されっぱなしは嫌なんだって」

……いや、押されっぱなしが嫌というか高校生である君に手を出したら犯罪なので逃げているだけなんですけど。

それにそもそも私は自分からグイグイ行くタイプでもないですし。

「だからね、押してダメなら——」

おや？勘違いしていますけど何はともあれケイ君は方針を転換して引いてくれるようですよ。

これは助かったんでしょうか？

「もう有無を言えないぐらい押し切れればいいって!!」

違った!?!引くんじやないんですか!?!

ツ!!どうして制服の上着を脱ぐんです!?!いやいやいや!!ネクタイを外す必要はあり

ませんよ!!

「フフツ、だから……既成事実さえあればもう逃げられないわよね?」

「ヒイイイツ!!」

何かケイ君がとんでもない事を言い出したんですが!? 黙って雲隠れした事が完全に裏目に出ました!!

というか……ケイ君の目が本気……く、食われる?!

「密室で2人つきり……逃げられるなんて思わない事ね」

ま、不味い、不味過ぎます。ケイ君が自分で作り出した場の空気に吞まれて正気を失っています。

「ああ、大丈夫よ。大人しくしてれば天井の染みを数えている間に終わるから」

そのセリフは普通男性側が言うのでは!?

「フフツ、フフフツ!! さあ、覚悟なさい!!」

ツ!! ツツコミを入れている場合ではありませんでした!! このままでは事案が!! 事案が!!

「えい」

「ふあ!?! お、お、落ち着いて下さい!! ケイ君!!」

診察台兼寝台に押し倒され——力が強い!? 何で片手で私の両手を押さえ込めるんですか!?!

ノオオオオー!! スーツとシャツのボタンを外さないでー!! そんな手つきで腹筋をまさ

ぐるのは止めて下さいー!!

「フフツ、私は落ち着いているわよ」

嘘だ!!か、神様!!お助け下さい!!この場の空気を壊すだけでいいですから!!

そうすればきつとケイ君も我に返ってくれるはず!!

なのでどうかッ!!

「ケ、ケイ君!!今ならまだ間に合います!!ですから!!」

「シヤラップ。うるさいわよ……そうだ。口を塞いじやえばいいのね。ん〜」

ケイ君の顔が近付いて——神……様。

「——失礼します、隊長。撤収の準備が……」

「……」

「……」

神は居た。

「あ、あれ?あーあー……し、失礼——」

ナイスタイミングです、アリサ君!!助かりました!!お陰で場の空気は完全におじゃん

です!!

「ではでは私はこれで!!」

ケイ君が背後を振り返ったままの状態で硬直してしまったお陰でマウントポジション

ンから逃げ出せました。

さて、無表情かつ瞳孔が開いた目でケイ君がアリサ君を凝視している隙に逃げまじょう!!

「え、あ、ちよつと!!お願いだから行かないで!!」

おつと?!アリサ君に手を掴まれてしまいました。

「大丈夫です!!アリサ君なら大丈夫です!!」

だから、その手を離して下さい!!

「大丈夫って、何が大丈夫なんですか!!お願いだからこのまま隊長に襲われて下さ——
ああ!?!」

「さようならッ!!」

アリサ君には申し訳ないですけど、私が助かるにはこうするしかッ!!

「お願いだから……戻って——……うっ?!」

「……」

「あ、あの、あの……隊長?」

「……なあに?アリサ?」

「その……怒ってますよね?」

「怒ってる?アハハハッ、怒ってなんかないわよく。フフフッ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、だつて誰にでもミスをする事はあるでしょ？」

「そ、そう言ってもらえるとありがたいですけど……その、顔が笑ってないですよ？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ねえ、アリサ」

「は、はい!!」

「懲罰房、行こっか」

「ヒッ!？」

元役人の影響力

しずか side

ふむ。困った。職員室や教員室にも姿が無いとなると先生は何処に居られるのであろうか？

「ええ、ですから……そのね？はい、はい。ケイ君の言う事も分かりますけど……うつ……黙って姿を消した事については申し訳なかつたです」

……む、あちらから微かに先生らしき声が。

「しかし、姿を消さ——え？会いに来ないと楯無高校に居る事を皆にバラす？ちよ、ちよつと待つてください!!そんな事をされたら大変な事に!!」

おお、そこに居られたか。うん？携帯を片手にワタワタと何やら取り込み中のご様子……仕切りなおすか？

「……わ、分かりました。時間を作つて会いに行きますから落ち着いて下さい。はい、はい。え？あの……何でサンダースの第3戦車倉庫で待ち合わせなんですか？第3戦車倉庫ってほとんど物置状態でいつも人が無いとか聞いて……え？細かい事はどうでもいい？いや、そうは言つても——ツ!?分かりました、分かりましたから。それで構い

「ません……ええ、では……また。はあ、困りましたね」

「いや、まあ……ちようど終わったみたいであるし、よいか。」

「失礼します、先生。少し宜しいでしょうか？」

「っ!?はい、構いませんよ。何ですか、しずか君?」

「次の戦——対戦相手がBC自由学園に決まりました故、そのご報告を」

「ほう。BC自由学園……ですか」

「うん?先生はBC自由学園と何か関わりがおありなのだろうか?」

「何やら懐かしむような悔いるような筆舌に尽くし難い表情を浮かべておられるが。」

「ええ、それでそのBC自由学園の物見に鈴と共に明日行く予定なのですが、先生も一緒に如何かと」

「専門的な知識がある先生に見てもらえばBC自由学園の弱点等が分かるかも知れぬし、是非とも付いて来て頂きたいのだが。」

「明日……ですか。すみません、明日は先約がありました」

「む、そうでしたか……」

「残念ではあるが先約となれば致し方なしか。」

「また今度誘って下さいね。ああ、そうだ。BC自由学園は色々面白いチームですか」

らしつかり見て勉強してきて下さい」

「?」 承知致しました」

——さて。というわけで鈴と共にBC自由学園が試合を行っている会場にやって来たのだが。

おお、やっておる。しかし……。

「解せぬ」

「え?どうかした? 姫」

「いや、あそこの部隊を何故動かさぬのかと思つてな。今投入すれば一息で勝負がつくというのに」

出し惜しをしている訳ではなさそうだが。

「お、お前さん 通 だね」

「え!?! 嘘!?!」

うん? 誰ぞ? 鈴は相手の事を知っているようだが。

「ありや旧BC高校側だからさ」

「ペパロニ!! 出店をさぼるな!!」

「あ、いけね」

「アンツイオ高校のアンチヨビさんにペパロニさん!? 何でここに!?!」

ほう。この方々が彼のアンツイオ高校の隊長殿と副隊長殿であるか。

「全く、ペパロニのやつはちよつと目を離すとすぐにさぼる……ああ、すまない。ウチもタンカスロンはちよくちよくやつてるから偵察兼資金稼ぎにな。——で、BC自由学園の話だけ……」

「お客さん、ご注文は？」

「この店で一番いいモノを」

「了解。——でだ。『今の』あいつらは要するに味方同士で足蹴り合いながら戦車道をしてるんだ」

「それは何とも穏やかな話ではないな。しかし、今のとはどういう意味か」

「『今の』をやけに強調していたが。」

「ああ、それを説明するとなるとちよつと話が長くなるんだが……その昔BC自由学園は元々BC高校と自由学園というマジノ女学院の分校——独立した2つの学園だったんだがな、生徒数の減少と学園艦の老朽化が原因で生徒達の意味を無視して無理やり統合されてしまったんだ」

「ふむ」

「それが尾を引いたという訳——いや、それでは話の辻褄が合わぬな。」

「まあ、統合自体はとある人の尽力があつたお陰で結果的には上手く行ったんだが……」

「そうそう。上手く行ったお陰で両校で培われてきた伝統や校風を失わないようにって互いに互いを尊重し合う形で右舷と左舷で分かれて暮らしていたりかつすね。あ、で面白いのが戦車道チーム。書類上はBC自由学園という1つの戦車道チームなんすけど実際はBC高校と自由学園の伝統を踏襲している2人の隊長とその仲間達で構成されている2つで1つの特殊なチームになっているんすよ」

「ほう、それは面白い」

「ペパロニの言ったように2つで1つの特殊なチームなもんだからオルトロスって渾名があつた程だ」

オルトロス……双頭の犬か。話が事実だとすると言い得て妙であるな。

「であるならばなおさら解せぬ。それほど仲が良かった者達が何故今は反目しあつているのか？」

「……お前達も知つているとは思うが大洗廃校の一件でBC自由学園の統合計画を最終的に上手く収めたその人、先輩——辻元局長がクビになつた事が原因だ」

「……辻元局長……」

おお、大洗廃校を撤回するため、そして腐りきつた国賊共を誅するために獅子身中の虫となり己が身命をとして生徒に忠を尽くした彼の御仁が関係しておられたか。

「全責任を負わされてクビになつた先輩の仇を討とうと、文科省討つべしを唱えたタカ

派——アスパラガス率いる旧自由学園勢と自らが引くことで事態の沈静化を図った先輩の意思を汲み、動く事をよしとしなかったハト派——ボルドー率いる旧B C高校勢の間で意見の食い違いが起きて喧嘩が始まり、そして今じや学園艦全体が旧B C高校と旧自由学園に別れて喧嘩状態っていう顛末さ」

「なるほど。そうであつたか」

「まあ、雲隠れしてしまつた先輩が見つければ解決するだろうけどな。あいつら単純だし。あ、そうだ。お前達、先輩について何か知つてないか？あの人の事だから戦車に係する所に必ずいるはずなんだ」

「いや、知らぬな」

彼の御仁には私も一度会つてみたいものだが、姿を消しておるといふのであればそれも容易い事では無かろうな。

アスパラガス side

「アスパラガス殿、御身にとつてタンカスロンとは……何ぞや？」

誰ぞますか、こいつは。

役立たずの旧B C高校の連中がアンチョビの出店で買い食いしているのを叱り付けに来たら妙な奴に絡まれたぞます。

……まあ、いいぞます。質問に答えてやるぞます。

「決まっているございます。全力を……全身全霊を賭けるべき戦場でございます!!」
「ほう……」

やっぱり妙な奴でございますね。私の答えを聞いてまるで好敵手とでも相見えたような嬉しそうな顔をしているございます。

「最もそれはタンカスロンだけでなく、戦車道全般に言える事でございますが」

あの方のご指導を受けた者として当然の心構えでございます。

「それは頼もしい。応援しておりますぞ」

「? メルシー」

「では、我らはこれで」

……何だか最後まで妙な奴だったございますね。

しかし、あのリボン……どこかで。

密会

ふむ。しずか君と鈴君は今頃BC自由学園の試合を観戦している頃合いでしょうか。彼女達のチームはしずか君達がこの先の事に備えて学ぶべき……学んでおかなければいけないノウハウを持つチームですからね。是非とも多くの事を見て学んできてくれればいいのですが。

……おっと。考え事をしていたら待ち合わせの場所を通り過ぎてしまいそうになりました。危ない危ない。

さて、目的の人物は……あ、居ましたね。

「お待たせしました」

「いえ、こちらこそコーチが大変な時にお呼び立てして申し訳ありませんわ」

ふう。無事にマジノ女学院の戦車道チームの隊長であるエクレール君と合流出来ました。

「いやいや、構いませんよ。では、とりあえずそのカフェにでも入りましょうか。いつまでもここに居るのは少々人目につきますから」

「……はい」

うーん。エクレール君の顔色があまり良くありませんね。

相談があるという事で緊急用回線を介して呼び出された訳ですけど、まさかまた何かマジノ女学院であつたのでしょうか？

以前はマドレーヌ君から隊長の座を勝ち取った際のゴタゴタで体調を崩すほど精神的に参っていたので手を貸しましたが。

今回は一体何なんでしょう。

「コーヒーを2つお願いします。——それで早速ですが相談というのは？」

「はい。それがその……」

「……？」

よほど言い出しにくい事なんでしょうか？

しかもつ面のエクレール君がすごく言い澁んでいます。

「B C自由学園の事なのです」

「B C自由学園？」

はて、母校であるマジノ女学院の事ではなく他校——B C自由学園の事でエクレール君が相談にやって来るとはどういう事なんでしょうか。

「実はコーチが学園艦教育局長をクビになつた事を受けてB C自由学園の隊長であるアスパラガスとボルドーの意見が真つ二つに割れてしまいましたの。片や報復、片や忍耐

という風に。そしてアスパラガスとボルドーが意見の相違から喧嘩を始めたのを切っ掛けに今現在学園艦全体で旧BC高校と旧自由学園に分かれて争っている有り様で」

「……はあー……」

そういう事ですか……うん。もう何か大体分かりました。

「つ、申し訳ありません。最初は宗校である私達の力で収めようとはしたのですが……力及ばず、ますます争いが拡大する始末で」

「ああ、すみません。今のため息は自分に対してですから気にしないで下さいね」

「え、あ、はい……」

全く、未だに統合計画の一件の事で私に恩を感じているあの子達の反応を読み間違えた私の失策です。

時間が無かったとはいえ、姿を消す前に会いに行っておけば良かったですね。

というか、自分のゴタゴタでBC自由学園がそんな状態になっている事に気が付けなかったなんて……一生の不覚です。

「それで……その……コーチも大変な時だとは存じておりますが、どうにかお力添えを頂きたい」

「分かりました。ちようどいい機会がありますし、そこで手を打ちましょう」

エクレール君にお願いされましたし、何より我が身から出た錆びの不始末はきっちり

付けなければいけませんからね。

断る理由はありません。

「お願いします」

しかし、それはそれとして私如きの事でチームの結束が揺らいでしまうのは頂けませんね。

さてさて。どう（教育）してあげましょうか。

威光と意向

「準備は万端……さあ、出陣ぞ!!」

「え!? ちよ、ちよつと待つてよ、姫〜!!」

やれやれ、何故かは知りませんがしるか君の士気の高いこと高いこと。

よつほどBC自由学園との試合を楽しみにしていたみたいです。

この前見に行った試合で何かあったんでしょうか?

ま、それはさておき。

今日はアスパラガス君とボルドー君の対立問題を解消しないといけませんから、私もしるか君の様に気合いを入れないと。

……しかし、局長という立場を失った私に出来る事は限られているんですよ。

まあ、状況に合わせて臨機応変に動きましょうか。

さて。それではとりあえず布石としてアスパラガス君とボルドー君にご挨拶（宣戦布告）といきましょう。

「——メルド（クソツ）!!ぬかったぎます。まんまと手の内を探られた訳ぎますか」

両チームが揃い試合開始前の挨拶中なのですが……やっぱりこの前の試合の時にし

ずか君とアスパラガス君の間で何かあったみたいです。

お互いに面識がありませんし。

「はて、何の事やら。我らは一観客として試合を見ていただけ故。しかし、1つ言わせてもらえば——既に勝負は決せり!!」

「ハハ……中々に言ってくれるざますね。結構、あの方の教えを頂いたBC自由学園の実力……とくと——なッ!」

おや? アスパラガス君がしずか君の後ろにいる私の事に気が付きましたね。

観客に私が居るといふ事がバレないようにと、つなぎを着て髪型をオールバックにしてあったせいか多少時間が掛かりましたが、この程度の変装であればやはり既知の相手には私という事がバレてしまうようです。

「お久し振りですね、アスパラガス君」

「は、はい!!——お前達何をやっているざますか!! 全員整列するざます!!」

「は? 何なんだ、アスパラガスの奴。整列ならここで……ッ! 整列、整列だ!!」

ふむ。アスパラガス君が後方に停車させてある戦車の隣に並んでいたボルドー君や他の子達を呼び寄せてくれたお陰で呼ぶ手間が省けましたね。

しかし、呼ぶにしてもそんな風に怒鳴ったりしなくたっていいんですよ。アスパラガス君。

それがボルドー君達も全速力で走って来なくて大丈夫です。

……ああ、言わんこつちやつない。1人コケました。

「これは一体……」

「え?え!」

おっと。いきなり直立不動で整列したBC自由勢の姿にせずか君と鈴君が状況を飲み込めず混乱していますね。

観客も少々ざわついていますが……まあ、話はすぐに終わりますし少しだけ待ってもらいましょう。

「ゴホン。では、改めまして。皆元氣そうで安心しました」

「ありがとうございます!!我々もコーチの御壮健なお姿を見ることが出来て光栄じます!!」

……光栄って、そんな大袈裟な。

まあ、アスパラガス君はいつもこんな感じでしたか。

「さて、挨拶はこれぐらいにして……本日私がここに来たのは他でもありません。君達のとある噂を耳にしたからです。何でも“私のせいだ”君達が不仲になってしまったとか」

「「「「……」」」」

あらら。さつきまで喜色満面だったアスパラガス君達の表情が180度変わってしまいました。

さすがに付き合いが長いと顔が笑っていても本当は怒っている事が分かるようです。「ねえねえ、姫。先生とアスパラガスさん達って知り合いなのかな?」

「うむ、恐らくは。しかし——うん?アスパラガス殿はどうされたのだ?歯の根が合つておらぬし、顔も真つ青であるが」

「本当だ。……あれ?他の人達も何か震えてない?」

しかし、そこまで怯えなくてもいいと思うんですけど。

「はつきり言つて……今回の件は少々ガツカリしました」

「……申し訳ありませんぞます」

「……返す言葉もありません」

あれ?いや、ちよつと待つて下さい。

何かアスパラガス君とボルドー君……涙目でチラチラお互いを睨み合つてません?

あれ?これ……お前のせいで怒られたじゃないか的な感じになつて溝が深まつてます?
す?

……不味い。

嫉心

「ああ、誤解が無いように言っておきますが私のために怒ってくれたアスパラガス君や私の意を汲んでくれたポルドー君、君達2人の意見自体はとても嬉しく思っていますからね」

「コーチ……」

「先生……」

危ない危ない。

溝を埋めに来たのにもう少しで溝を深めてしまう所でした。

「しかしながら私如きの事に対立し、チームを……引いては学園全体の分裂を招いてしまった事については頂けません」

慕ってくれるのは嬉しいですしありがたい話ですが、部外者の問題で内紛を起こすのはいけません。

「……ですが、ですが!!あのような無体はあまりに酷すぎます!!コーチ1人に全てを押し付け安穩としている愚物共には思い知らせてやる必要があるぞ!!だからこそコーチに大恩のある我々が革命を起こし、この閉塞しきった戦車道の世界に風穴を空

け、時ここに到つても平気で惰眠を貪る奴らを叩き起こし、この不条理に満ちた世界に鉄槌を下さねばならないぞます!!」

何か我慢ならぬとばかりに声を上げ目をキラキラさせたアスパラガス君が革命家の様な演説をしているのですが、私の様な者の事よりも戦車道に情熱を燃やし青春を楽しんで欲しい所です。

「お、おい、アスパラガス!!やめろ!!」

「君の気持ちはよく分かりました。アスパラガス君。しかし、君は一つ勘違いをしています」

「勘違いぞますか?」

「ええ、責任を取るのが私の仕事なんです」

「[[「……」]]」

うん?場が静まり返つてしまい——いや、なんでそんなに私の事をキラキラとした目で見詰めているんですか、君達。

当然の事を言つたのに何か好意的な解釈をされているような……。

「……では、コーチはあれで良かったぞますか?」

「うーん。欲を言えばもう少し局長として皆を見守つていたかったですかね。……つと。私の個人的な事はどうでもいいんです。今回の本題は君達の事なんですから。」

「……」

「……」

本音をポロツと漏らしたら今度は見るからにしゅんとなりましたね。何だか悪戯をして怒られた子犬達みたいです。

「まあ、本当なら他にも色々と言いたい事はありますが、以前なら露知らず今の私は完全な外部者ですし、今回の件の引き金となった原因でもあり、語る資格がありません。ですから今一度君達にはチームとは何なのかを試合の中で学んで頂きます」

「試合の中で学ぶ……ごますか？それは……つまり!!コーチがまた我々のコーチとして——」

「いえ、先も言いましたが私にはその資格も立場もありません。ですから私の教え子との試合の中で学んで頂きます」

「教え子?まさか……ッ!」

「ええ、訳あって今は楯無高校で教師兼戦車道のコーチをしています。ああ、この事はくれぐれも内密に」

「「「ッ!」」」

「な、何ぞ!」

「ヒツ!?!、怖いよ、姫!!」

あれ？今度は何故かアスパラガス君達が一斉にしずか君と鈴君を睨んでいるんですけど。

「そういう事ございますか……通りで戦い方が似ていたはず……ツ!!」

「姿を消す前にいくら頼んでもウチには来てくれなかったのに……ツ!!」

うーん。分かりません。

ほぼ無名のしずか君達から学ぶ事なんて無い!!みたいなプライドですかね。

「それではアスパラガス君、ボルドー君。君達の活躍を楽しみにしていますよ」

さて。挨拶も無事に終わりましたし、後はしずか君と鈴君にお任せしましょう。